

ペシャワール会

中村哲さん

追悼企画①

2019年12月4日、アフガニスタンで銃弾に倒れた中村哲医師を、読者の皆さんと一緒に偲びたいと思います。

今年、創刊10年を迎えた『季刊地域』ですが、前身は『増刊現代農業』と呼ばれるA5判の雑誌でした。その2002年2月号のテーマが「自然とともに平和をつくる」。冒頭に12ページにもわたり、アフガニスタンで医療・水利・農業支援活動が続けてきたペシャワール会・中村哲さんの講演記録とインタビューの記事がありました。当時のアフガニスタンの状況と、中村さんの活動のあらましが伝わるかと思ひ、ここに一部を抜粋して再掲載します。

また130ページからは、2002年から3年間、アフガニスタンで中村さんとともに用水路建設・農業支援などの活動をした橋本康範（現・農文協東北支部長）からの寄稿があります。合わせてお読みください。

アフガニスタンの

平和は

「水」でしか

つくれない

1000本の井戸を掘る

ペシャワール会・

中村哲さんに聞く

（増刊現代農業2002年2月号
同名記事より）



アフガニスタンで井戸掘り続ける「ペシヤワール会」現地代表の中村哲医師（福岡市出身）は「戦争どころではない。2年前（2000年）からの大干ばつのほうがずっと深刻だ」と警鐘を鳴らし続けている。

アフガニスタンは未曾有の大干ばつにみまわれ、1年間で100万人が餓死しており、その干ばつは、「地球温暖化による初の犠牲」ともいえるという。

その中村さんは、現在「より多くの人びとに実情を知ってもらいたい」と全国各地を駆け回って、報告会を開いている。2001年11月20日、福岡での報告会で、中村さんはアフガニスタンの状況を次のように語った。

お金がなくても生きていけるが、
雪がなくては生きられない

アフガニスタンの面積は日本の1・5より1・6倍。国土の大半はヒンズークシ山脈を中心とする山岳地帯です。典型的な砂漠気候で夏は摂氏52度を記録する日もあるほど暑く、冬はマイナス10〜20度がごく当たり前なほど寒いです。年間降水量は日本のわずか200分の1しかありません。人口は1200万人から2400万人まで諸説ありますが、真ん中をとり2000万人前後というのが正しいところでしょう。国民の95%以上は農民または遊牧民。アフガニスタンは自給自足の農村社会と小規模な遊牧社会が融合したような国なのです。

年間降水量が日本の200分の1しかないのに、なぜ自給自足の農耕生活ができるのか？ それは山の雪のおかげです。

もの申す

アフガニスタンには「お金がなくても生きていけるが、雪がなくては生きていけない」ということわざがあります。山に降り積もった雪と何千年もかけて蓄積された氷河こそがこの国の水源なのです。山の雪は夏に解けだして川をつくり、その川沿いに豊かな水田が拓かれ、農業が営まれています。

ラクダの背中に物資を載せて運ぶ隊商は農村部でごく普通に見られる光景で、末端の物流は依然として隊商が担っています。シルクロードの時代から1000年以上も変わらぬ暮らしを続けている地域もざらにある。国民の99・9%はイスラム教徒で、イスラム世界の中でもっとも古典的なイスラム社会がそこにあります。モスクを中心とする地域共同体が集合して出来上がっているのが、アフガニスタンという国なのです。

戦場だった農村に、
ソ連崩壊で人が戻った

1979年12月に旧ソ連軍の侵攻によりアフガン戦争（79〜89年）が勃発してから今に至るまで、この国はずっと内戦の余韻を引きずってきました。農村は戦場となり、一般の農民がゲリラとなって銃を手に戦ったのです。アフガン戦争の犠牲者は戦闘員だけで80万人、難民として逃げる途中に命を落とした民間人を合わせると200万人にも上るといわれています。共産政権下では「農村は封建制の象徴」とみなされ、村ごと抹殺されたケースも珍しくありません。600万人の人びとが難民となり、ペシヤワールを中心とするパキスタンの北西辺境州に逃れました。

アフガニスタンはハンセン病患者の多い国です。患者のほ